チェルノブイリ通信

2002年9月18日
No.54

発　行　チェルノブイリ支援運動・九州　事務局
連絡先　福岡県遠賀郡水巻町下二西3－7－16（株）ウインドファーム内
ＴＥＬ・ＦＡＸ　093－203－5282
E-mail　jimu@cher9.to
ＵＲＬ　http://www.cher9.to/
郵便振込口座　01770－1－65328　チェルノブイリ支援運動・九州

＊第１回ブレスト市移動検診報告
＊リクビダートルについて考える
＊「アレクセイと泉」
映画上映のお知らせと学習会の様子
＊ベラルーシからの手紙（最終回）
＊のぞみ作品入荷のお知らせ・
支援コーヒー＆マトリョーシカセット
＊募金ありがとうございます

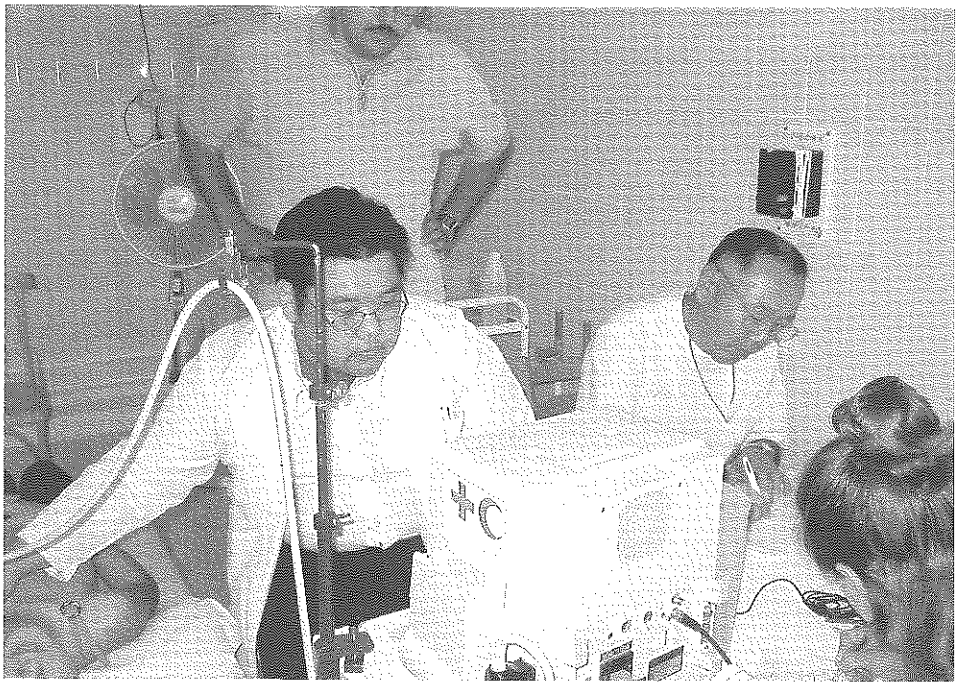
ベラルーシ・ブレストでの初めての検診

第一回、ブレスト市移動検診報告

報告／谷口　恵

ベラルーシ共和国・ストーリン地区においてスタートとした甲状腺ガンの早期発見・治療を目的とした移動検診。後の５年間で、合計９回の検診が行われ、この度、新たな検診の拠点をブレスト州ブレスト市においての第１回目の検診が行われた。

ストーリン地区から引き続く移動検診活動の新たなる舞台として



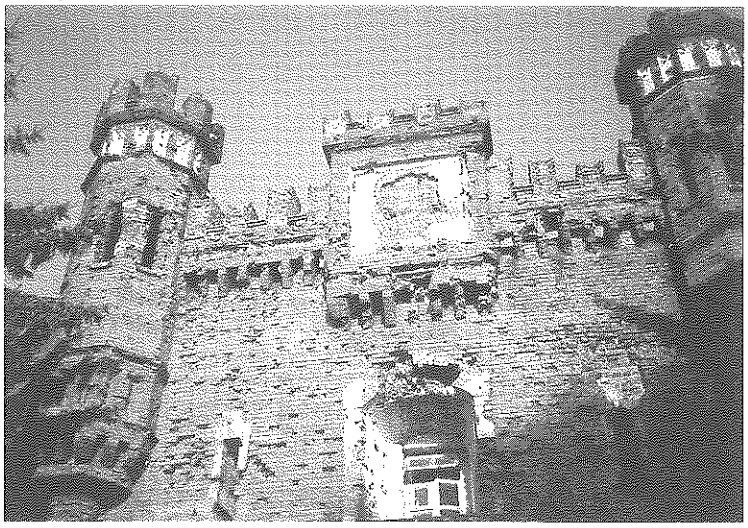
七月二十八日、日本からの検診団六名とミンスクの医師三名、赤十字総裁アントン・ロマノフスキー氏、心理学専門のリュドミラ・ウクラインカを載せた二台の車がミンスクを出発した。

行き先はブレスト州ブレスト市。ロシア革命後一九一八年の「ブレストリトフスク条約」というと聞き覚えがある人も多いだろう。

ポーランド国境に接するこの都市は、第二次世界大戦当時ドイツとソ連の軍隊がぶつかり合った、大きな傷を負った場所でもある。車が市街部へ入っていくと、当時対ドイツ戦で勇敢に闘い抜いたとされる「英雄都市」に指定された都市名を刻んだモニュメントが、中央分離帯に等間隔で整然と並ぶ。その傍らには大きな樹木の並木が堂々としており、第二の都市とはいってもミンスクとはまた違ったどっしりとした表情を持つ街だ。「ベラルーシの中では緑が一番多い都市なんだよ」とブレスト保健局長のセルゲイ氏は誇らしげに語ってくれた。

戦跡として今も広々とした緑の敷地に残されているブレスト要塞では、当時、押し寄せるドイツの大軍にソ連軍兵士五〇〇人が要塞に立てこもって対抗した。ドイツ軍側は「さっさとやっつけて今日はゆっくり夕食がとれるな」くらいのつもりで攻めたのが、一ヶ月の血みどろの戦いになったという。レンガの壁に残る弾丸の跡や資料館に残る傷ついた物品の数々が戦闘の過酷さを伝え、兵士の名を刻んだ石碑や巨大な兵士を象ったモニュメントが人々の姿を忘れまいと語りかける。

そして、その一度血に染まった大地には二十数年後、



ブレスト要塞の門がまえ

チェルノブイリ原発事故により目に見えない放射能が降り注ぐこととなったのである。

今年、いつもより数段に暑い夏をむかえたブレストの明るい日差しの中に、その折り重なるような悲しい歴史を見て取ることはもちろんできない。そこにいる笑顔の人達の記憶の中で、その歴史はどんな姿をしているのだろうか、としばし考えた。

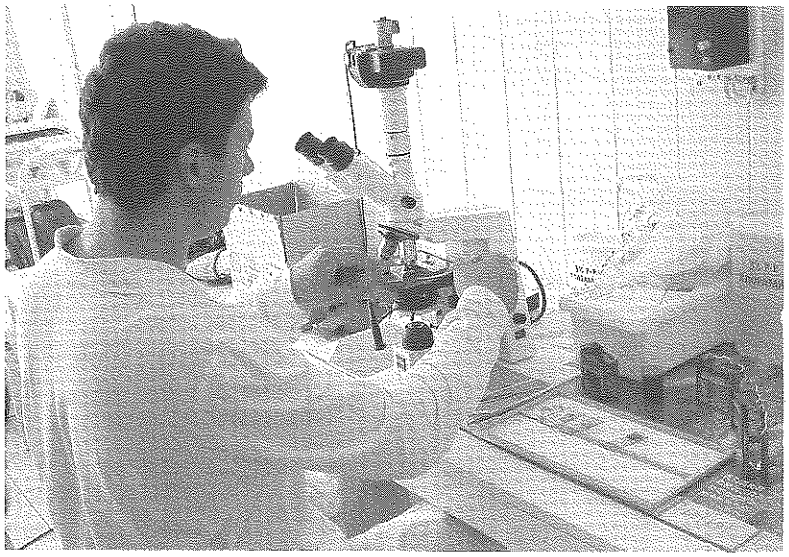
医療検診活動の舞台となるブレスト内分泌診療所での検診が始まった。十一月に訪れた時よりも建物がこぎれいに感じられる。改装したようだ。わたしは検診に参加するのが初めてだが、過去に参加した人達から以前の検診の拠点であったストーリン地区での不便だった話をいろいろと聞いていた。それに比べると、ずいぶん設備も整っており、医療活動もスムーズに行えそうだ。とは言え、前回「一般のガラスを自分たちで切って使っている」と話していた形の不揃いなプレパラートは相変わらずそのままに使われていた。

実は、今回、税関手続きのトラブルで検診までに器具を届けることができず、きちんと形の揃った日本製のプレパラートが彼等の手元に届くのは二ヶ月後になってしまった。

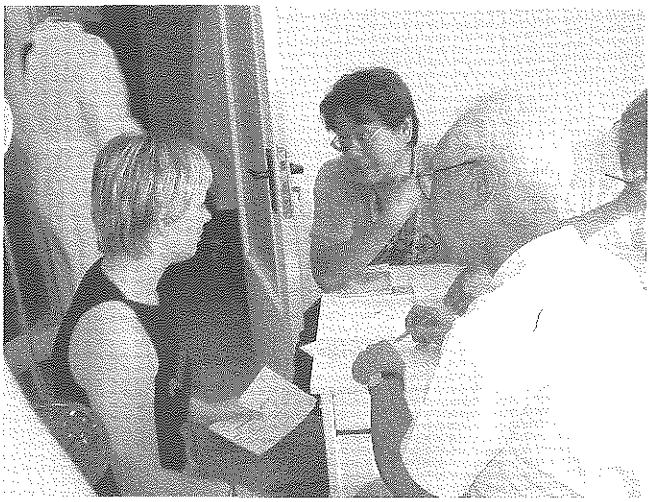
この診療所に拠点を移すにあたっての重要な点のひとつは、必要な器具等を充実させ、ここで働く医療専門家達が十分な技術を身につけることができるようなベースをつくることにある。少しずつ日本からの技術を学んだ専門家達がその力を発揮するようになれば、そしてそれが後輩のお医者さん達に伝わっていき、各地で活かしていけるようになれば、いつか日本から検診団が行く必要はなくなるだろう。「もう来なくても自分たちでやっていきます」と言ってもらえる日が早く来ればいい、と願っている。

検診室の扉の外には、自分の順番を待ちきれずに立って待っている人も多い。部屋から出る度にたくさんの視線が集まる。ペンや飴玉、折り鶴などの入った簡単なお土産の袋をひとりずつ手渡すと、「いらない」と言う人も中にはいたが、ほとんどの人達が一瞬驚いたような表情のあと「ありがとう」と言って顔を緩めた。中には逆にチョコレートをプレゼントしてくれた人もいた。

患者さん達に直接話を聞いてみたいと思いながらも後込みしていたわたしは、中でも人なつっこい笑顔を返してくれた女の子におそるおそるながらも話しかけた。二十一歳で学生のユーリアは、三ヶ月の妊婦さんでもあった。「事故の影響は心配。みな少なからず何らかの影響を受けていると感じているから。子どもの生育は今のところ順調よ。」と流暢な英語でにこにこ



チェルノブイリ支援運動・九州から贈った顕微鏡で
診断するアルツール医師



ブレスト診療所での検診風景

と話してくれるので、ずいぶんと緊張もほぐれた。「あなたたち日本からのチームが来るっていう噂は、あちこちでみんながしているのよ。」と言う。ちょっとオーバーに言ってくれているんだろうな、と思ったが、次に話しかけた女性は登録にもれたのに、わざわざ出かけて来たと言う。わたしたちの滞在中三日間で検診をできる人数は約八十人から九十人程度と限度がある。事前に、現地医師によって大勢を対象に行われる検診の中で、特に問題がないとされた患者さんは、登録できない。「それでも、ひょっとしたら診てもらえるかもと思って来たの。ぜひ診てもらいたかった。」

たくさんの人達が一縷の望みを持ってやって来る、検診団の噂を皆がしている、という事実や、何気なく口にされる言葉が、現地に住む人達の心の中にある不安を物語っている。人間その他の動植物の命を汚染し奪ってきた、というのがチェルノブイリ原発事故の最大の悲劇であるが、それと同時に、大多数の人達が健康であってもいまだにその確証を持てず、「もしかしたら自分もガンかもしれない」といういらない心配を抱えて毎日をすごさなければならないという状況もまた、事故の残した深刻な影響と言えるだろう。

検診に参加した日本からのお医者さん達によると、「触診やエコー検査の時点で『細胞を採って調べるまでもない、問題ない』と言っても、患者さん達の多くは細胞を採ってほしがる。日本の患者さんなら、そう言えばたいてい納得するのに。」という。細胞を採るのにはもちろん痛みをともなうが、それでも詳しく調べてほしいと言う。それだけ、不安の根は深いということだろう。また、期間中にわたしたちはテレビ局二つとラジオ局の取材を受けた。日本からの支援に対する人々の関心は高い。

検診に訪れた女の子

今回、三日間で八十五名の患者さんの検診を行い（そのうち数名は飛び入りの希望者だった）、十五名に甲状腺ガンの疑いがあり、手術が必要であることがわかった。進行の比較的遅い甲状腺ガンは、早期発見がカギとなる。疑いの見つかった十五名にとっては治癒・回復へのきっかけを手にしたことになり、問題のないことがわかった残りの人達にとっては、少し安らいだ気持ちでの毎日がはじまった…そうあってほしい。

患者さんの聞き取り調査

クリセビッチ・ユリア　二十一歳

女性　学生（環境学専攻）

現在、妊娠三ヶ月。チロキシンを摂取している。身の回りの人は、皆少なからず事故の影響をひきずっており、健康状態を心配している。母から、この検診のことを聞いた。皆日本からのチームが来ることを知っており、その話しをよくしている。

五十代・女性

職場でこの検診のことを聞いて、登録しようとしたが、いっぱいでできなかったのだが、ひょっとしたら

と思って来てみた。日本のチームに診てもらえないので、現地の医師に診てもらう。日本の機材はいいので、診てもらいたかった。

リュボフ・チェルニヤフスカヤ　四十代

医師から聞いて来た。事故当時はブレストにいて、事故のことは次の日には知っていた。一年前に鉄道病院で手術を受けて、半分切り取った。今はチロキシンを飲んでいる。どうも調子が悪い。

一九八六年九月に生まれた息子は甲状腺に結節がある。小さいので心配はないと言われ、観察状態。発育は順調。ほかの家族は大丈夫。今は特に食べ物などには特に気を付けていない。

マリア・ヤンチュク　十二歳

親子で来た。甲状腺の肥大があるので、定期的に検診している。日本からのチームが来ると聞き、はっきりさせるために来た。ほかの家族は問題ない。原因は環境問題にあると思う。放射能の影響ももちろんあると思う。

柔道を四年間やっていて、ブレスト州で女の子で三位。医者の許可がないと柔道をできないので、今日診てもらって判断してもらう。九月には全国大会がある。

ナタリヤ・コレジ　十七歳　女性

はじめて吸引穿刺をした。イワセビッチ地区病院の集団検診で肥大がわかったので、来た。事故の影響があると思う。

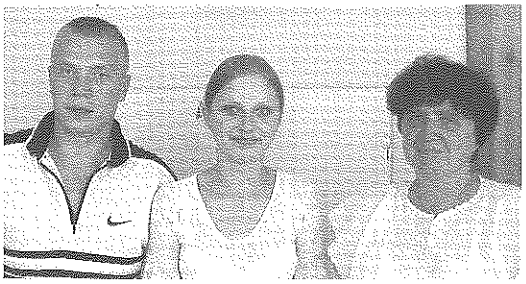
その叔母　エレナ・ジチェネワ

十二年前に手術で一つとって、今新たに発見されている（甲状腺ガンの疑い）。事故が原因でこういうことになった。当時はテレビやラジオを見ていても何の情報も得られなかった。

障害者なので今は働いていない（脚が不自由）。甲状腺の障害では、国からの保障はない。

ベロニカ・ヤロフスカヤ　十六歳　女性

生まれて十四日目で事故があった。学校の集団検診で自分だけひっかかって、病院で調べたら甲状腺の病気の第三段階だということがわかった。自覚症状はない。ここから二五〇キロ離れたイワセビッチ地区から母親、ボーイフレンドと一緒に来た。ほかの家族は元気。



オブラベツ・ターニャ　二十一歳　女性　看護婦

医者からここに来るようすすめられた。良性の結節で、特に問題はない。血圧の上昇がある。五歳の時、事故が起こった時はルマニエツ（二五〇キロのところ）に住んでいた。住民は約五〇〇〇人で、十人が甲状腺ガン手術をうけ、そのうち子ども五人。姉妹にも甲状腺の肥大がある。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

患者さんは、四十～五十代の女性が多いように見受けられる。男性は五十代、六十代くらいの人が数名いただけで、若い男性はいない。アルツール医師に、どうして女性が多いのかをたずねたところ、ホルモンのバランスの関係によるとのこと。

原発事故処理班について、考える

一九八六年四月二十六日から今日までのこと。

報告　谷口　恵

リクビダートルは、今…

リクビダートルとは、原発事故事故処理班を意味するロシア語。

1986年4月26日、チェルノブイリ原発で起きた爆発は、放射能を日本にまで届いてしまうほど、すさまじかった。

事故当時、その爆心地とも言うべき事故現場での作業を余儀なくされたリクビダートルは、当然、大量の放射能を浴びることになった。

事故から16年が過ぎた今も、その放射能は、当時リクビダートルだった人々の生活に大きな傷を残している。

リュドミラ・パブロワさん

チェルノブイリ支援運動・九州の移動検診で、心理面のケアをしてくれているリュドミラ・ウクラインカ（以下、〝リューダ〟で記載）の紹介で、私はあるリクビダートルのアパートを訪ねることができた。

放射能の充満する中、事故処理にあたったリクビダートル。自らの身をもって、火の中に投げ込まれる水となった人達。わたしはその本人を目の前にして何を聞いたらいいだろうか？　どう会話をしたらいいのだろうかと少し緊張していたが、リュドミラ・パブロワさんは、明るい笑顔で迎え入れてくれた。

「おかまいなく」と伝えていたにも関わらず、お酒や料理を用意して待っていてくれ、「話しは食べた後にしましょう」と人なつっこい笑顔で言った。

おかげで、スムーズに会話を始めることができたが、想像していた通り、チェルノブイリ原発事故により一変してしまった生活の様子は、とても厳しいものだった。

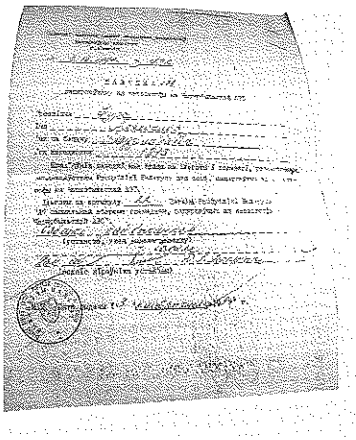
今から、十五年前に起きたチェルノブイリ原発事故において、当時軍の看護婦だったリュドミラさん（三十八）は、原発事故の被害者の手当に従事した。軍人であった夫アナトリー（五十三）も、リクビダートルとして現場に出入りする車の放射能除染作業、村の建物を壊す作業、村から出る人たちの持ち物を制限する作業に従事した。

事故当時、チェルノブイリから二十八キロ離れていたサービッチ村に住んでいたリュドミラとアナトリーは、放射能の危険性を誰からも何も知らされないまま、自ら希望して原発事故の処理に参加。原発に近づくにつれ、頭や喉に痛みを感じたという。

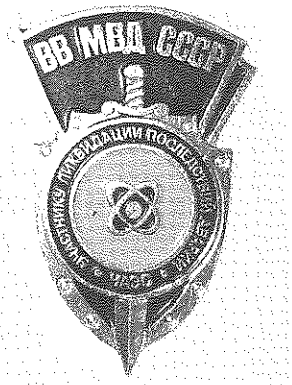
すでに、放射能は放出されており、屋外で作業した人の被曝がひどかった。屋外で作業した人達には、肝ガンやのど、喉頭ガンが多かったようだ。

自分も当然、被爆していたが、その被曝量はどれくらいかわからないが、考えないことにしている。

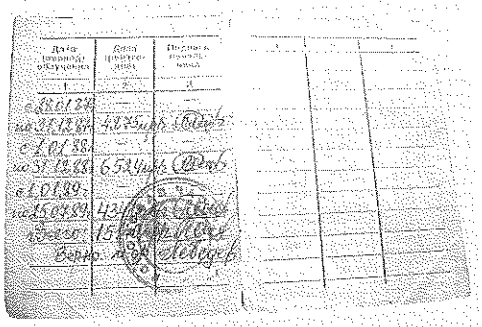
次第に話しが家族の健康状態のことになり、過去のカルテを医療通訳の山田英雄さんに見てもらう。



子どもの被災証明書



リクビダートルへ贈られた勲章



被曝蓄積線量証明書

リュドミラさん本人は、現在、甲状腺肥大が見られたが、山田さんによればさほど、問題ないとのこと。

夫のアナトリーさんは、脳出血、狭心症、自律神経失調症、また胆嚢の手術を受けているという。

二人の息子のうち、長男のアレクサンダー（十八歳、事故当時三歳）は三歳のときに聴力を失った。「すぐに補聴器をつければ、言葉を覚えられたのに」とリュドミラさんは悔やんでいた。また、次男のアントン（十二歳）にも甲状腺肥大が見られるという。

こうした状況と、チェルノブイリ原発の放射能にどのような因果関係があるのはは分からない。他のリクビダートルもたくさん死んでしまったが、原因は分からない。

両親は、今もチェルノブイリ原発から三十キロ以内のゾーンにある村で生活している。両親ともに健康状態は良く、リュドミラさんたちは、半年に一回は両親を訪れるようにしている。

村にバスは通っておらず、三十キロゾーンの入り口で警察による検問を受けた後、村までの十キロほどの距離を歩いていかなければならない。

リュドミラさんは、話終えると、次々に各種証明書、当時の軍服姿の写真、村の写真、家族の写真などをすべてオープンに見せてくれた。

夫のアナトリーさんは少し離れた川へ釣り（仕事のうちだとか）に行っており、息子ふたりはガールフレンドのいるダーチャ（郊外別宅）に行っていて、話を聞くことはできないまま、私はリュドミラさんのお宅を後にした。

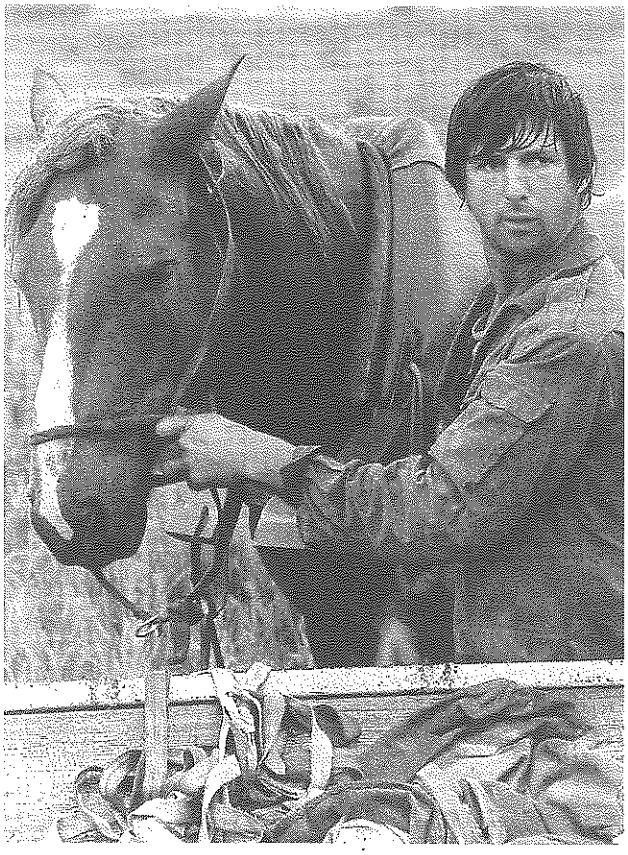
今回の聞き取り調査に同行したリューダが、帰り道の雪だるま号の中で教えてくれた、アナトリーさんの言葉がわたしの心に深く残っている。

「もし時間を戻すことができて、もう一度事故の前に戻ることができたとしたら、また事故の処理作業に参加しますか？」と聞いたリューダに対し、「もしわたしがやらなかったとしても、ほかの誰かがやることになったでしょう。それならば、もちろんわたしはまた参加します。」とアナトリーさんは即答したという。

リューダはわたしに「彼のような人を本当の英雄というのだろう。」と言った。

一緒に作業にあたった人達が次々に死んでいき、自分の子どもも聴力と言葉を失い、自分自身も体調がすぐれない、そんな中でのリュドミラさん、アナトリーさん一家の十六年間はどんなものだったか、とても想像が及ばない。アナトリーさんのその言葉と、リュドミラさんの笑顔の奥にあるものを考えずにはいられなかった。

お知らせ　映画「アレクセイと泉」上映会

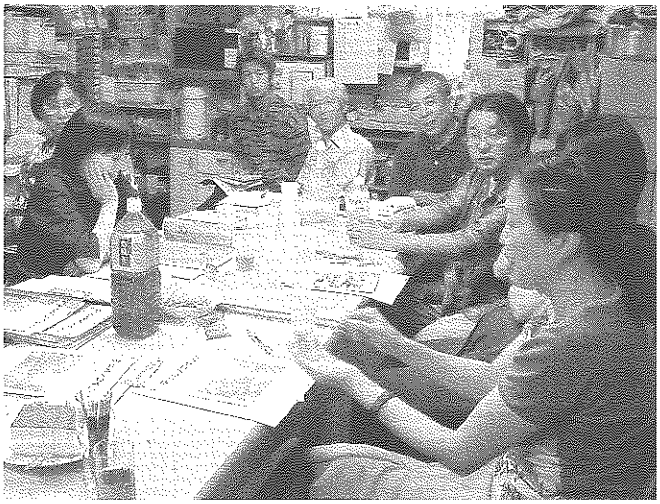


1. 日　時　9月29日（日）3回上映（入れ替えなし）
①11：00　②13：20　③15：40
2. 会　場　福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
福岡市早良区百道浜３－７－１
（福岡市営地下鉄　西新、藤崎下車）
3. 入場料　一般：1,400円　前売：1,200円
シニア・障害者：1,000円　中・高生：800円
（福岡市内プレイガイド、チケットぴあ、ローソンチケットで発売）
主　催：福岡映画サークル協議会
福岡市中央区春吉3－22－17協立ビル２階
TEL＆FAX. 092－781－2817（昼間は不在）
メール：DZA04225@nifty.ne.jp（井上）
ホームページ　http://homepage2.nifty.com/fukuokaeisa/
事務局　田中・塩見・井上

映画の上映に先立って、チェルノブイリ支援運動・九州、運営委員の津島さんによる学習会も行われました

本橋成一監督の「アレクセイと泉」という映画が福岡市内でも上映されることとなり、僕は福岡映画サークル協議会に、ベラルーシの現地の状況説明と、活動報告を行いました。

この協議会、六十年代には三万人超の会員を擁したそうだが、現在は一〇〇名前後とのこと。それでもこうして事務所を維持して、勉強会をしてみると十人以上の方が集まって下さいました。



学習会の様子

参加された方々は、もともと市民運動などに興味がおありの方ばかりのようで、熱心に話を聞いて下さっていて、とても嬉しかったです。話は、現地の経済、教育、交通、避難の状況から、支援内容、果ては僕自身がどうしてこの運動に関わったのかにまで及びました。質問がたくさん出ると、話しに退屈されていないのがわかってとても安心して話せました。

（津島　朋憲）

チェルノブイリ後を生きる子どもたち～ベラルーシからの手紙

最終回　　力丸　邦子

●神様のいたずら？　ナイスシュート！●

九月の始めに、嬉しい手紙が届きました。「検診に行ってきました。今のところ調子はいいです。クニコ！　ボクは、国立の工業大学に合格しました。とても嬉しい。けれど、これから先の勉強の難しさを思うと、ちょっと心配です」イワンからです。イワンはサッカーが好きな少年で、初めて会った夏は、また子どもそのものでした。数人の男の子がサッカーで遊んでいる中に、私はいきなり入りこんでボールを蹴ったのです。なんと、そのひと蹴りが、みごとゴールに入ったのです。子どもたちは、〝おおっ！〟と歓声を上げ、それから仲間と思ってくれて、夕方になると宿舎の前で待っていて、ボールをかざして〝遊ぼう〟と示します。運動が苦手な私が、しかもたった一度蹴ったボールがゴールに入るなんて、これは神様のいたずらだったとしか思えません。イワンは家の手伝いをよくする子どもで、その様子も手紙で時々知らせてくれました。ママが心臓病で二週間入院した時も、父を手伝ってよく働いたようです。イワンはテレビを観るのが好きで、特にサッカーの試合には夢中になっているようです。日本への関心も高く、テレビニュースにも注意を向けていて、「大雨の被害を知ったが、あなたは大丈夫か？」、「台風で家が壊れたとテレビで観たが、あなたのところでは？　と心配している。知らせてください」と、即、心配しての便りが届きます。ベラルーシの子どもたちを心配しているつもりの私が、こうして子どもたちに心配してもらっているのです。

●縁が縁を呼んで●

ユーラからの手紙も、もう十二通になりました。が、いつもママからです。「ユーラの手紙だと、あなたはわからないでしょうから」と書かれた最初の手紙に、「私たちは、日本にもうひとつの家族があります」と里親の住所が書かれてありました。北陸に住むKさんです。そこで私は、「Kさんにユーラのサナトリウムでのスナップ写真を送りました。Kさんは、たいへん喜んでくれました。ユーラの家は集団農場にあるようで、暮らしの大変さをママはいつも書いてきます。「田舎暮らしは、苦労ばかりだ」と。Kさんにユーラの写真を送りました、と知らせてからは、いつもKさんによろしくと添えられてあり、その都度、私もKさんに伝えています。そんなご縁で、Kさんとも親しくなりました。つい先日、私は思いついて、「Kさんの写真を私に送ってください。ユーラに送ります。きっとユーラの家族は喜ぶでしょう」と話してみました。「こんな写真でいいのかしら」と、Kさんは家族のスナップ写真を快く送ってくれました。今頃、Kさんの写真が届いて、ユーラのママは大騒ぎをしているかもしれません。

手紙の豊かさについて　～チェルノブイリ後を生きる子どもたち、最終回に寄せて～

４回の連載でお伝えしてきた力丸邦子さんのエッセイも、今回で最終回を迎える。改めて、これまでの作品を読み返してみた。電話、FAX、そしてインターネット。ベラルーシとの関わりにおいても、多くの情報を、迅速に細やかに、伝え知ることができることになり、把握できる状況も膨張していく。

それは、紛れもなく、「便利」なことである。夜、１ヶ月後の検診のスケジュールを記したメールを送り、翌朝、「確認」の返事が返ってきたとき、「何てすばらしいのだろう」と感嘆したものだった。

だが、そのとき、気付くまでに多少の時間は費やさなければならなかったが、確実に失うものもあったのだ。車の免許をとれば、ほんの10分そこらの本屋にいくのにも、車を頼ってしまい、ささやかな散策の時間を失ってしまうように、私は、手紙というものと、そこから醸し出される「想う時間」というもの失った。

独学でロシア語を学び、辞書を引きつつ書き、そして読み、紡がれ広がる世界。力丸さんの作品を読んで、その掌に、すっぽり収まり、温められる物語に、ことさらに心惹かれるのも、便利さの影で失ったものへの憧れがあるからだと想う。

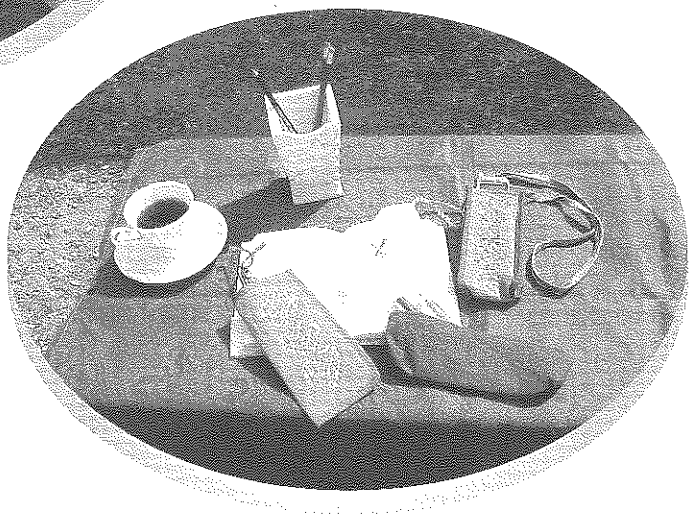
（チェルノブイリ支援運動・九州　矢野宏和）

ベラルーシの民芸品の数々

のぞみ21より、新作入荷

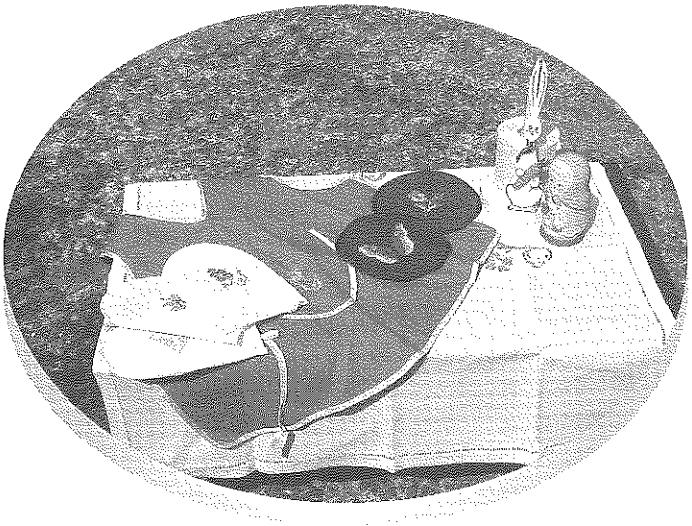
被災者と障害を持つ若者たちの福祉工房
"のぞみ21"より、新作を入荷してきました。

作品紹介



★ペンケース	￥1,000
★ペン立て	￥700
★携帯電話ケース	￥800
★しおり	￥200
★めがねケース	￥500
★キッチンペーパーホルダー	￥1,600
★エプロン	￥1,500
★テーブルクロス	￥1,500～
★コースター（大）	￥400
★なべつかみミトン	￥600
★マトリョーシカ人形（5つ入り）	￥2,000

ご購入希望の方は、
チェルノブイリ支援運動・九州事務局まで。



今だけ特別！ 10セット限定

チェルノブイリ支援コーヒー＆マトリョーシカ人形（５つ入り）セット
￥2,500（送料・税込み）

コーヒーは…

チェルノブイリ支援コーヒーとして販売されるジャカランダコーヒーは、ブラジルで農薬や化学肥料を一切使わずに育まれた有機栽培のコーヒーです。

自然や人を大切にしたいという想いから、コーヒーの有機栽培に取り組み始めたカルロスさんですが、チェルノブイリ原発事故についても「同じ地球に住む人間の問題」として積極的に関わり、作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」のポルトガル語版の作成においても、惜しみない協力を頂いております。

チェルノブイリ支援コーヒー

（有機無農薬ジャカランダ農場産・200g）

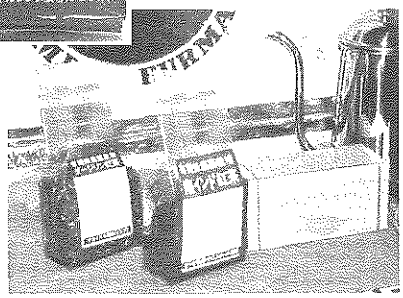
７７５円

★ご注文の際に豆か粉かをご指定ください

チェルノブイリ支援紅茶

（有機無農薬南インド紅茶・100g）

４８５円



５パック未満のご注文は送料200円。
合計注文数が５パック以上の場合は送料無料。
売り上げの一部がチェルノブイリ支援へのカンパとなります。
ご注文はチェルノブイリ支援運動・九州事務局まで！

作品に関する詳しい情報は…

★ チェルノブイリ支援運動・九州のホームページhttp://www.cher9.to/mingei/でその他の作品もご覧になれます。

★ 福岡YWCA内のフェアトレードショップ“ダブルピース”でも取り扱っています。

★ 全国で行われる各種イベント・バザーにて販売しています。

・国際協力フェスティバル（東京　日比谷公園）10月５日（土）６日（日）
・地球市民どんたく（福岡市　ソラリアプラザ１Ｆゼファ）10月13日（日）14日（祝・月）
・セヴァン・スピーカーズ・ツアーＩＮ福岡（福岡市　天神イムズホール）11月16日（土）

★ のぞみ21の作品を扱いたいというご希望がありましたらチェルノブイリ支援運動・九州まで寄せ下さい。

たくさんの募金をありがとうございました

永冨けし　稲吉清子　遠藤礼子　古川玲子　岡本幸恵
大園広子　古川恵子　園田敬子　南祐子　松里英男
原岡ひとみ　松尾満子　豊田直也　深堀ミチ子　間地
俊雄　大坪玲子　川村公子　藤本浩美　石橋芳子　濱
田幸子　中本岐余子　小出としえ　金井順子　大和圭
子　永雄千恵子　中川英夫　野口和子　足立信子　西
原ますみ　豆田優子　林隆子　緒方ミサ子　小門満智
子　佛淵信夫　田中加津代　服部佳永　金丸美佐子
森下由紀子　山崎末吉　重高恭子　日高太　森木美樹
穐吉和代　民本康代　松本みね子　緒方貴穂　江越知
佳子　松尾菊恵　力丸邦子　野口裕子　吉田久美子
丸山くるみ　早田美香　前田・渡辺・中西・沖　山田
美佐子　松下竜一　後藤千秋　松本弘子　高村久美
上川倫子　山口弘子　福田直子　西岡利子　上田和子
河井万里子　安倍聡子　関盟子　久保山彬子　室屋芳
乃　冨永和子　薬丸淑子　大谷正穂　成田美津江　前
田順子　中村順子　内藤節子　右田由美　野上丈仁
グリーンコープ生活協同組合おおいた　米沢美佐子
佐々木郁江　片渕多喜子　和田伸夫　かどもと眼科医
院　加登本紘　木村みさ子　林田実子　稲田あけみ　保
元内科クリニック　滝波眞理子　日置美穂子　仲宗根
明美　進藤輝幸　山本和子　金山涼子　福内康代　徳
永亜菜　西本順子　志村信子　古田初子　森戸春江
福永弘恵　木田啓子　横山真希　梶村静江　アイラン
ドツアーセンター　伊東眞司　脇山和子　大中百合
太田千賀子　郡司清子　久家照子　松木裕之　宮田香
子　荒木潔枝　磯道綾子　岩崎美津子　原田和代　高
塚節子　宇都美咲子　佐藤照子　園久美子　松永庸子
藤田はつほ　土井早苗　福本勍子　藤原知子　原田育
子　平間千恵　宇都宮裕子　宮野久仁子　吉森睦子
清水一雄　中島まゆみ　藤田順子　石橋啓子　三上錬
子　吉田純枝　立石千絵　巽健　加藤幸　川崎君子
井上幹男　本祥周史　長谷川明子　壱岐敦子　上持秀
男・由利子　蒲池悦子　田原美代子　山岡勝江　伊勢
田規子　広渡由美子　井上美由紀　西尾れい子　三塚
ゆかり　松崎光子　小柳みどり　宮元寿子　古賀尚子
矢野通子　古賀教子　平田真澄　椛島真由美　菅原滋
子　米倉啓子　伊藤利恵　中村洋子　高山百合子　堀
苑美代子　田中修一　田中美佐子　中山たまき　安岡
繁子　葉祥明　吉村芙美　野中孝子　林田洋子　大賀
和男　泉やよい　井手公平　古賀輝洋　井上信子　高
藤富美子　めぐみ保育園職員一同　高地土と生命を守
る会　グループ・モモ　大工原千春　小林由美子　グ
リーンコープ生活協同組合ひろしま　澤田和子　小野
田京子　筑豊互助会　水車むら農園　舞鶴幼稚園保護
者　森田ゆかり　河野知暁　渕レディスクリニック　渕
利雄　松本弘子　グリーンコープ生活協同組合くまも
と　堀田徹子　内藤安子　ほか多数（敬称略・順不同）

（二〇〇二年六月一日より二〇〇二年八月二一日までの募金です。通信にお名前を紹介することをご許可頂いた方、ならびにチェルノブイリ支援コーヒーの購入を通して活動を支援下さった方のみ、掲載しています。）

三千円コース　七二三、〇〇〇円（二三七口）
五千円コース　三八〇、〇七〇円（六七　口）
一万円コース　四四三、一四〇円（四〇　口）
その他カンパ　四六二、三七二円（五一　口）
（分割払いの人もいるので、数字は割り切れていません）
合　計　一、二八五、五八三円

★株式会社カタログハウスより三五〇万円の活動支援をいただきました。

★〝ブレストにおける第1回検診〟には、
・財団法人福岡国際交流協会より「福岡国際協力人材育成」助成として専門家派遣渡航費
・チェルノブイリの母子支援基金より医薬品等購入のための補助金
をご支援いただきました。

募金者からのメッセージ　一部抜粋

●お役に立ちますように●子ども達のために少額ですが送ります●いつもありがとうございます●みなさんの幸せを祈っています●映画（ナージャの村・アレクセイと泉）を観たい！●この運動がもっともっと広がりますように！●通信、いつも読んでいます。ご苦労様です。●お幸せな日々を願います。●一人では出来ないことでも皆んなで力を合わせて頑張りましょう！●少しですが…皆の力の一つに●明るい未来のためにすこしでもお役にたてたら…●チェルノブイリの支援コーヒーは友人より入手し日頃愛飲しています●活動初めて知りました。応援します。●昨年〝脱原発〟の学習会に参加しました。●話しを聞けば聞く程原発の恐ろしさを感じずにはいられませんでした。●我が子が日本で健康に暮らしていることを考えたときに世界中の子ども達が健康で幸福に暮らしてほしいと願わずにはいられません。●少ない金額ですが、少しでもお役に立てれば幸いです。●現地の皆様、病気が回復に向かいますように――と願っています。